

## 二月八日の出家踰城と敦煌の法會、唱導\*

荒見泰史

### はじめに

二月八日は、古來四月八日と並んで釋迦牟尼世尊の誕生した日とされてきた。例えば『過去現在因果經』卷第一<sup>1</sup>、『佛本行集經』卷第七<sup>2</sup>等にはその日にちの記載とともに釋迦牟尼誕生時のいわゆる「王宮誕質」の情景が描かれていることは良く知られている。

しかし、いつの頃からか佛誕を祝う灌頂會は四月八日に定着するようになる。その流れの詳細については確かなことはわからないが、西晉沙門釋法炬譯『佛說灌洗佛形像經』には四月八日を佛誕の日として以下のように言っている<sup>3</sup>。

佛言：“所以用四月八日者，以春夏之際，殃罪悉畢，萬物腴生，毒氣未行，不寒不熱，時氣和適。正是佛生之日。諸善男子善女人，於佛滅後，當至心念佛，無量功德之力，浴佛形像如佛在時。得福無量，不可稱數。”

(下線は筆者による。以下同じ。)

「浴佛形像」の作法をともなう佛誕の法會を説明するくだりで、氣候的に良いことを述べる點は、そのとりおこなう季節として適していることを言っているようにもとれる。

いずれにしても、日本においても佛誕を祝う灌頂會は8世紀奈良時代までにはすでに四月八日に定着し<sup>4</sup>、二月八日はと言えば灌頂會ばかりかほかの行事が執り行われることすらもなくなっていたようである。今日においては二月八日に何ら

\*本稿は日本學術振興會科學研究費補助金「敦煌文獻中にみられる唱導資料の綜合的研究」(基盤研究B、研究代表者：荒見泰史)の成果のうちの一部である。

<sup>1</sup> 『大正新修大藏經』第3卷、625a、629a。

<sup>2</sup> 『大正新修大藏經』第3卷、686a。

<sup>3</sup> 『大正新修大藏經』第16卷、796c。

<sup>4</sup> 『續日本後記』卷第九、『日本紀略』前篇第十五などには、仁明天皇承和七年四月八日に律師靜道が初めて清涼殿において灌佛を修したことを記している。

かの法會が開かれることも稀で、各寺院で個別に行われるものを除けばこの日の法會はあまり一般的ではないと言ってよい。

しかし、この二月八日は、10世紀ころまでの敦煌において、四大齋日の一とされ、盛んに佛事が行われていた。

たとえば以下のS.2567『(擬)齋日曆』には以下のようにある<sup>5</sup>。

1. 大乘四齋日：二月八日、四月八日、正月八日、七月十五日。
2. 三長齋月：正月、五月、十月。六齋日：八日、十四日、十五日、
3. 廿三日、廿九日、卅日。……
- ……

これらの日に行われるそれぞれの法會の名目はここには一一記されないが、8世紀ころの成立とみられる法會の願文などに用いられる美辭麗句を集めた文範集『齋琬文』の記載によってそれらを知ることができる。

36. ……………《王宮誕質》四月八日 斯乃氣移璇律，景絢朱躔；祥風蕩吹于
37. 金園，瑞日融輝於寶樹。莫舒八葉，搖翠影於周霄；桂寫半輪，掩浮光
38. 於魯夕。池花含秀，十方開捧步之蓮；天雨流芳，九龍灑濯襟之液。
39. 恆星落耀，珮日揚輝；味甘露以凝滋，蓋鮮雲而颺影。黃鶯囀樹，爭吟
40. 聖喜之歌；素蝶縈空，競引蓬山之舞。毛翔（翎）羽族，總百億而同瞻；
41. 神境天宮，亘三千而率奉。《逾城出家》二月八日 斯乃韶年花媚，仲景序
42. 芳春；皇儲拔翠之辰，帝子遺榮之日。于是璇枝逗影，乘月路以霄
43. 征；琼萼馳襟，躡星衢而夕照，税金輪于寶柱，騰王馬於珠城；韶
44. 光絢而天際明，和風泛而霞莊淨。龍駒駕迴，將淑氣而同飛；鶴蓋
45. 浮空，共仙雲而并曳。遂使九重哀怨，警睿軫於丹墀，萬品懷惶；
46. 捕神踪於鹿野。于時妙花擎日，清梵携風；浮寶蓋於雲心，颺珠幡
47. 於霞腹。幢撥天而亘道，香翳景〔以〕駢空；緇俗遐邇而星奔，士女川原
48. 而霧集。同歸聖景，望披塵外之踪；共屬良辰，廣樹檀那之業。
49. 於是供陳百味，座拂千花；投寶地以翹誠，叩金原而瀝想。
- ……………

P.2940 『齋琬文一卷并序』

8世紀ころとされる『齋琬文』の記載によれば、上の様に四月八日「王宮誕質」、二月八日「踰城出家」のほか、正月十五日を「轉妙法輪」、二月十五日を「現歸寂

<sup>5</sup>P.3795にも同様の記載が残されている。ただ「大乘四齋日：二月八日、朔月八日、四月八日、七月十五日」のようにして配列順序を変えている点と、正月を「朔月」としている点に違いがみられる。

滅」として四齋日の願文の範例をあげており、先の9、10世紀敦煌の「大乘四齋日」とは若干違ってはいる。この点については別稿に改めて論じる予定であるが、概ね9、10世紀の齋會の變化の中で、正月八日の燃燈會<sup>6</sup>や七月十五日の盂蘭盆會といったより通俗的な法會が徐々に重要度を増していったのではないかと推測される。そうした通俗化と法會の變化についてはまだ議論が必要であるが、いずれにしても、少なくとも四月八日と二月八日に関してはそれぞれ「王宮誕質」と「踰城出家」としている点は一致しており、これにより、『齋琬文』の8世紀の頃までには二月八日は釋迦が出家した日、つまり釋迦八相のうちの「出家踰城」に当たる日とされ、それを祝う法會が開かれていたことにみは確かめられるのである。

他にもS.2832『(擬)願文等範本』中の年中行事をあらわす記述には以下のようにある。

211. ……中旬：季冬將半，礪氣正凝；風利如  
 212. 嚴水纔以成冰，風暫來而似箭。下旬：玄各（冬）欲謝，青  
 213. 陸將回；寒惧退以彌嚴；氷夏（愒）泮而愈（逾）昨。歳日：月正  
 214. 元日，律應新年；四時別起于三春，萬物更添一歳。  
 215. 十五日：初入三春，新逢十五。燈籠大樹，爭然九陌之時；舞席  
 216. 歌延（筵），大啓千燈之夜。二月八日：時當二月，景在八晨，在菩薩  
 217. 跋王宮之時，如來踰城之日。是以都人（人）仕女，執蓋懸幡，疑（擬）  
 [ ]白飯  
 218. 之城，似訪朱筆（踪）之迹。二月十五日：仲春二月，十五半旬；雙  
 219. 林入滅之時，諸行無常之日。人、天號哭，自古興悲；  
 220. 虛空，千（于）今上（尚）痛。……

S.2832『(擬)願文等範本』

ここでも、二月八日を「菩薩跋王宮之時，如來踰城之日」つまり釋迦が城を出て出家した日として考えられていたことがわかる。

なお「踰城出家」を祝う二月八日には、「都人仕女，執蓋懸幡」のように世俗の多くの人々が莊嚴された寺院に集っていたことが分かり、何らかの法會が行われていたことが想像される。これは先の『齋琬文』に「于時香花擎日，清梵携風；浮寶蓋于雲心，颺珠幡于霞腹。幢撥天而亘道，香翳景[以]駢空；緇俗遐爾而星奔，士女川原而霧集」とあるのにも通じるものであり、古くから僧侶ばかりか俗信徒である士女の集まる法會が行われていたことを知ることができるのである。

<sup>6</sup>正月八日の燃燈會については『廣弘明集』「統歸篇第十卷三十（『大正新脩大藏經』第52卷355c）に「正月八日燃燈」詩あり。敦煌における正月の燃燈會の開催日については諸説ある。

こうした資料により、かつて譚蟬雪氏も「由衙府主辦，還可講唱與二月八有關的講經文、變文、佛曲等，並有踏舞助興」のように言い<sup>7</sup>、この日の法事には歌舞音曲のほか俗講などが開かれていたことを予測されている<sup>8</sup>。

本稿では、その様に二月八日に敦煌で世俗の信者を集めて開かれていたとみられる法會と、そこで講じられていた可能性のある俗講の様相について、譚蟬雪等の説によりながら、さらに具体的な資料を集めた上で議論を進めてみたいと思う。

## 二、二月八日の法會の願文『二月八日文』と『踰城文』

敦煌文獻中に見られる二月八日の法會に関わるとみられる文獻は少なくなく、願文の類のみでも『二月八日文』や『踰城文』といった題名のものが数多く残され、二月八日の法會に関する情報を知ることができる。本節では、まずそれらの記述について見てみたい。

まず、敦煌文獻に残される二月八日に關わる願文類では、『齋琬文』以外で比較的古いとみられるのがP.3728の『二月八日』である。

08. 二月八日
09. 贊脓德道邁古今，德光海内，八表咸伏，四塞無（事）<sup>9</sup>，
10. 揚釋教於國中，播真宗於城内，名僧間出，
11. 碩德拯生，英聲縱美於遐荒，功名不墜於
12. 即日。者（這）則有我此卅僧統番（蕃）大德之謂矣。唯
13. 大德門願望重，懿戚豪華，脫榮貴而歸緇，拂
14. 囂塵而出俗，心融嵬解，識達空苦，慈愍爲懷，
15. 仁明作務，縮一卅之權要，使三寶之肅邑，道俗咸
16. 賴於弘揚，庶品競忻於法化。今者，屬以韶年
17. 媚景，仲序始春，太子踰城之辰，如來涅槃（槃）之月。（於）
18. 左迴開關，右遠城池，幡幢里野而翩翩，瑞像本
19. 而岌岌。士女隘隨，緇素駢囂，追古聖之貴蹤，
20. 訪先賢之舊徹，建斯大會，福慶難名。將願
21. 善被蒼生，次資家國。亦有城隍長幼，道俗
22. 梨织，各捨有限之資，共建無疆之福，將欲掃

<sup>7</sup>譚蟬雪「二月八日盛節」の項、『敦煌學大辭典』、上海辭書出版社、1998年、頁434。

<sup>8</sup>譚蟬雪氏の『敦煌歲時文化導論』（新文豐出版公司、1998年）の「二月八日」（頁75-91）の項にはさらに詳細に資料を集めて二月八日の儀禮について紹介されており、参考となる。

<sup>9</sup>S.1924、P.2855、P.3332『（擬）迴向發願文』に「更愿八方无事，四塞長清；万姓歡娛，三軍喜泰」の句あり。

23. 災殃於域外，集勝福於域中。故得上下同忻，
24. 士女虎（互）肅。以供設供，乃啓乃誠，能事克從，總
25. 申表慶。於是宏開法座，廣闢香筵。彌陀山高，
26. 名僧兩會<sup>10</sup>，經梵寥亮，簫管啾啾，幡花絲敷，爐
27. 煙鬱郁。是時也，風吟東郭，雲曠西郊；百草未青，
28. 三春已暖。總斯勝善，莊嚴我當今聖神贊（臙）：
29. 願雄益作鎮，宣惠化於三邊，壽永年長，
30. 雲於萬里。又持勝福莊嚴，僧統教授
31. 山河而永注，福同江海而逾深，
32. 遐宣，弘持之心不歇，風光一裏，梵宇
33. 苦海之津良（梁），爲緣生之眼目。即有節已下諸
34. 英雄等：佐天離勾，助聖安人，福將山岳與齋
35. 高，壽等海泉而深遠。合城士女，威沐浴宜，
36. 助供榮齋，同霑吉慶，然後，國安人泰，遐肅
37. 遙寧，干戈不舉於塩場，五稼豐登於壘
38. 畝。

「我當今聖神」たる「贊臙」の徳を讃える文辭の見られるこの文獻の内容は吐蕃統治時代のものと考えられている。文獻として見ても9世紀と見て問題がなさそうである。

全文は、まず28行目にもある贊臙の徳を讃えることから始まり、「今者」に始まる一段では踰城出家の法會が行われるその時の季節と道場の様子を言い、人々が寄進して道場を開き災厄を掃い、福を集めようと願うことを讃え、そしてその徳を贊臙や僧統などに廻向莊嚴する言葉などが続く。贊臙の徳を讃える部分以下は、願文の段落でいうところの「道場」、「歎徳」、「莊嚴」が続くものと見てよいであろう。

使用される文辭から見た場合、先の『齋琬文』の記述と比べて似た表現が見られるのは偶然ではないであろう。『齋琬文』の「斯乃韶年花媚，仲景序芳春」を「今

<sup>10</sup>兩會、春秋の二講を指すものと見られる。兩會を春秋二講として表現する文として、ほかにS.5957『轉經文』中の以下のような例がある：「故得八關在念，六度明（冥）懷；每歲春秋，弘施兩會。」官寺によって春秋二講の官齋が開催されることについてはこれまでも那波利貞氏はじめ多くの論考がある。ただ開齋の日時については不明な点が多く、郝春文氏も「總之，現有材料說明，敦煌的春官齋設於五月，秋官齋則或設於九月，或設於十月」（『唐後期五代宋初敦煌僧尼的社會生活』、中國社會科學出版社、1998年、頁214）のように言うとおりの不確かな点が多い。本稿資料のように二月開齋の可能性もあるとすると、或いは日時が不確定であった可能性も否定できないのではないかと考える。

者，屬以韶年媚景，仲序始春」とし、「道場」の部分では「于時香花擎日，清梵携風；浮寶蓋于云心，颺珠幡于霞腹。幢撥天而亘道，香翳景〔以〕駢空；緇俗遐爾而星奔，士女川原而霧集」は「於 左迴開闢，右遶城池，幡幢里野而翩翩，瑞像本而岌岌。士女隘隨，緇素駢囂，追古聖之貴蹤，訪先賢之舊徹，建斯大會，福慶難名」の部分に近い表現が見られている。

また、上のような「道場」の部分以外にも供養者の徳を讃える「歎徳」の部分にも「於是宏開法座，廣闢香筵。彌陀山高，名僧兩會，經梵寥亮，簫管啾啾，幡花絲敷，爐煙鬱郁」といった法會の描寫が見られ、吐蕃時代の敦煌においても二月八日の踰城出家を祝う法會が開かれていたことが確認される譯である。この齋會は「亦有城隍長幼，道俗梨織，各捨有限之資，共建無疆之福，將欲掃災殃於域外，集勝福於域中」の一段にも表されるように「城隍長幼，道俗梨織」つまり城中の僧侶及び在俗信徒の寄進に支えられる通俗のものであることもここには表されている。また「兩會」と、所謂春秋二講の俗講のうち、春講がこの時代においてはこの二月八日に行われることもわかるのである。

以上のような、二月八日の法會に用いられたとみられる願文の類として、『二月八日文』、『踰城文』の題名で、敦煌文獻にはかなり多くの文獻が残されている。

例えば、同じ吐蕃時代と見られる『二月八日文』には以下のようなものがある。

36. 《二月八日文》我釋迦降跡娑婆，示生五濁，弃輪位誓趣菩提；現心相而道成（成道）
37. 闡吾（五）乘而蓋（益）物。化盡沙界，徳被無疆；號天人師，稱一切知（智）。厥今盛事者，
38. 蓋是法王回地之日，如來大闡之時；磧深宮五欲而遊歷四門。老病以發
39. 心，都（睹）沙門而出離；父王留御，夜半逾城；且通神蹤，旋繞城闕。居則昔今
40. 杳邈，教（散）而教迹由（猶）存。故屬良晨（辰），緬尋薦事。是以集二衆，召律人；結
41. 幢幡，張寶蓋；請魚梵，奏簫韶。讚頌上聞于九天，鍾（鐘）鼓傍臨於百
42. 里。總斯勝福，莫限良緣，先用奉資我當今聖神贊腋：伏願
43. 國昌人泰，壽等干神坤；北極齋安，南山永固。三邊罷干戈之役，四塞無
44. 降（烽）燧之憂；海内和平，天長地久。

P.2237 『二月八日文』<sup>11</sup>

「莊嚴」の部分に「先用奉資我當今聖神贊腋」としており、やはり吐蕃時代に讀

<sup>11</sup> 参照黃徵、吳偉『敦煌願文集』（岳麓書社、1995年）。本稿では修正した箇所がある。

まれた内容であることが確認される。この例では、釋迦の徳を讃える段落、願文類の段落でいえば「号頭」に当たる部分が記される點が先の文とは異なるが、基本となる部分は同じであり、「是以集二衆，召律人；結幢幡，張寶蓋；請魚梵，奏簫韶。讚頌上聞於九天，鍾（鐘）鼓傍臨於百里」のように法會の狀況が記されている。これに類する『二月八日文』と題する文獻は多く残されているが、おおむねの内容はほぼ一致し、徐々に書き換えられ使用され続けていたことが分かる。

續く歸義軍時代においても、これに類する文が多くみられる。

85. .... 『二月八日』 夫能仁<sup>12</sup>善權，務濟群品；凡諸妙事，  
 86. 豈勝言哉！ 今則伴春如[月]，律中夾鍾（鐘）；暗魂上於八葉<sup>13</sup>；後身逾城之  
 87. 月，前佛拔俗之晨（辰）；左豁星宮（空），右闢（辟）月殿。金容赫昧（奕），猶聚（日）之影寶山；  
 88. 白毫暉光<sup>14</sup>，若<sup>15</sup>滿月之臨滄海。烏菟前引，睚眦而張拳；  
 89. 狡狴後行，奮迅而矯尾。雲舒五彩，雨四花於四衢<sup>16</sup>；樂奏八音，歌九功  
 90. 於八胤。是日也，玄鳥至，鴻雁翔；翠色入於柳枝，紅蕊含於柰  
 91. 苑。物（惣）斯繁<sup>17</sup>善，先用上<sup>18</sup>資[梵釋四王、]龍天八部<sup>19</sup>：惟願威光盛熾，神力無疆；  
 92. 擁護生靈，艾安邦國。大中皇帝：聖壽剋昌，淳風永播；金輪与  
 93. 法輪齊轉，佛日將舜日交暉；妖氣肅清，保寧宗社<sup>20</sup>。朝廷將相：  
 94. 伏願鹽梅大鼎，舟楫巨川，祿極萬鍾<sup>21</sup>，位霑（占）八座，榮班日漸，寵詔時  
 95. 遷<sup>22</sup>，冠蓋盈門，弓裘繼業，然九農闢，百穀登[豐]，兩國平方（安），方泰干  
 96. 戈，琇弓矢囊，動植霑恩，傳天威化。

P.2631 『二月八日』

92 行目には「大中皇帝」を讃える莊嚴の言葉が述べられるので、この文が大中

<sup>12</sup>能仁、P.3566、P.2058 本は「能人」に作る。

<sup>13</sup>暗魂上於八葉、P.3566、P.2058 本は「暗魂上於一弦，莫芳（莢）生於八葉」に作る。

<sup>14</sup>暉光、P.3566、P.2058 本は「光輝」に作る。

<sup>15</sup>若、P.3566、P.2058 本は「爲」に作る。

<sup>16</sup>雨四花於四衢、P.3566、P.2058 本は「雨四花於四衢」に作る。

<sup>17</sup>繁、P.3566、P.2058 本は「多」に作る。

<sup>18</sup>上、P.3566、P.2058 本は「奉」に作る。

<sup>19</sup>P.3566、P.2058 本に見られる「龍天八部」の前の「梵釋四王」の句は見られない。

<sup>20</sup>大中皇帝……保寧宗社、P.2854 『禮佛發願文』に同様の記載あり。

<sup>21</sup>祿極萬鍾、同様の句は S.2146 『(擬)行城文』、S.2146 『行城文』、P.2449 『(擬)尊囉鹿捨施追薦亡妻文』等にも見られる。

<sup>22</sup>榮班日漸、寵詔時遷、P.2854 『禮佛發願文』に「榮班日漸，寵空時増」の句あり。

年間(847-860年)に用いられたものであることが分かる。敦煌では歸義軍時代に入ったばかりの頃のものということになる。

なお、以上の内容の「夫能仁善權」から92行目の「擁護生靈，艾安邦國」までは、ほぼ同様の文がP.3566、P.2058にも見られているが、後半の莊嚴の部分が大きく書き換えられていることが特徴である。重複する部分も多いがその特徴を明らかにするために関連する部分を挙げておこう。

P.2058『二月八日逾城文』は以下のとおりである。

134. 『二月八日逾城[文]』 夫能人善權，務濟群品；凡諸妙事，豈勝言哉！  
今則
135. 伴春如月，律中夾鍾(鐘)；暗魂上於一弦，萸芳(莢)生於八葉；後身逾城之
136. 月，前佛拔俗之晨(辰)；左豁星空，爲(右)辟月殿。金容赫暎(奕)，猶聚日之影
137. 寶山；白毫光輝，爲滿月之臨滄海。烏菟前引，睚眦而張拳；狻
138. 猊後行，備迅而矯尾。雲舒五彩，雨四花求(於)[四]衢<sup>23</sup>；樂奏八音，歌九功於八
139. 胤。是日也，立烏至，鴻雁翔；翠色入於柳枝，紅蕊含於柰苑。總斯多
140. 善，先用奉資梵釋四王、龍天八部；惟願威光盛熾，神力無疆；擁護
141. 生靈，艾安邦國。又持勝福，次用莊嚴我當今天城(成)聖主賢位；伏願
142. 聖壽延昌，淳風永播；金轉(輪)與法輪齊持(轉)，佛日將於舜日交暎；妖氛
143. 肅清，保寧宗社。又持勝福，次用莊嚴我河西節度使貴位；伏願
144. 佐天利物，助聖安人；福將山岳與齊高，壽等海泉如深遠。又持
145. 勝福，次用莊嚴；伏惟使臣、僕射福同山岳，萬里無危；奉招(詔)安邦，再
146. 歸帝釋(室)。又持勝福，次用莊嚴<sup>24</sup>，又持勝福，次用莊嚴則我河西
147. 都僧統、內僧統和尚等貴位；伏願長垂帝擇(澤)，爲灌頂之國師；永鎮
148. 台階，讚明王之利化。又持勝福，次用莊嚴都衙已下諸官吏等；
149. 伏願金柯蓋(益)茂，玉葉時芳；盤石增勳，維城作鎮。然後天下定，海內
150. 清；無聞徵戰之明(名)，有賴威雄之化。

P.2058『二月八日逾城文』<sup>25</sup>

<sup>23</sup>P.3566もP.2058に同じ。P.2631のみ「雨四花於四衢」とする。

<sup>24</sup>「又持勝福，次用莊嚴」は重複。

<sup>25</sup>参照黄徵、吳偉『敦煌願文集』(岳麓書社、1995年、頁445)。本稿では修正した箇所がある。



儀禮の中で莊嚴する対象を「天成聖主」、「河西節度使」、「使臣、僕射」、「河西都僧統、内僧統和尚」、「都衛已下諸官吏」へと廣げ、地方官にまで廣げられていくのはまさにこの時代の特徴と見られ興味深い。別稿にも論じる予定であるが、こうした點に地方分權時代移行期における寺院と地方權力との結びつきを感じさせるのである。

なお、こうした二月八日の儀禮に宣讀されたと見られる『二月八日文』の様々な系統は、この時代以降にも新たな文が作られたようで、以下のように多くのものが見られている。

以下は S.1441 『(擬)二月八日文等範本』の内の一點である。

法王誕跡，託質深宮；是（示）滅雙林，廣理（利）郡（群）品。

1. 《二月八日文》智覺騰芳，功勇齊着；大雄方便，動物斯均。王
2. 宮孕靈，寔有生於千界<sup>26</sup>；逾城半夜，求無上之三身。今以三
3. 春中律，四序初分；柳絮南枝，冰開北岸，遂乃梅花始笑，喜
4. 鵲欲巢；真俗旋城，幡花隘路。八音競奏，聲謠（搖）兜率之音；
5. 五樂瓊簫，響振精輪之界。總斯多善，莫限良緣，先用莊嚴
6. 梵釋四王、龍天八部：伏願威光盛運，救國護人；濟惠慈悲，年
7. 豐歲稔，伏持勝善，次用莊嚴我河西節度使尚書貴位：伏願
8. 五岳比壽，以日月而齊明；祿極蒼（滄）瀛，延麻姑之萬歲。然
9. 後休兵罷甲，鑄戟銷戈；萬里澄清，三邊晏靜。

S.1441 『(擬)二月八日文等範本』<sup>27</sup>

ここで気づくのは悟真撰とされる『俗講莊嚴迴向文』と文辭の一致が見られることである<sup>28</sup>。この『俗講莊嚴迴向文』は歸義軍節度使時代の始まった9世紀半ばの作と考えられるもので、題名からもわかるように俗講儀式の願意を述べる中で莊嚴の作法で用いるために作られた文で、願文の「莊嚴」の段落を美辭麗句で纏めあげたものである。内容的には、「先用莊嚴梵釋四王、龍天八部：伏願威光盛運，救國護人；濟惠慈悲，年豐歲稔」のように「梵釋四王、龍天八部」に功德を迴向して莊嚴し、救いと豊作を願う在俗信徒の願意が加えられているのが特徴的である。

この文の文辭は後代の多くの儀禮で讀み上げられるために使用されたことが分かっており、八關齋、五會念佛法事などの通俗化され法會資料のほか、變文の一

<sup>26</sup> □部分は原巻でも線で囲まれ、削除を意味しているものとみられる。

<sup>27</sup> 参照黃徵、吳偉『敦煌願文集』（岳麓書社、1995年、頁31）。本稿では修正した箇所がある。

<sup>28</sup> 『俗講莊嚴迴向文』に関しては、拙稿「敦煌本“莊嚴文”初探」(『敦煌變文寫本的研究』、中華書局、2010年、頁216-239)“The Tun-huang Su-chiang chuang-yen hui-hsiang wen and Transformation Texts”, *Acta Asiatica*, 105, The Toho Gakkai, 2013を参照。

部にもその痕跡が見られている。ここで、『二月八日文』からも在俗信徒の聞きなれた『俗講莊嚴迴向文』の痕跡が見られることは、ここではより通俗化の進んだ法會、俗講などが行われていたことを予測させるものである。

なお、同一寫本にはもう一点内容の異なる『二月八日文』が記されている。ここでは先の『俗講莊嚴迴向文』を引用していた個所の14、15行目に「總斯多善，無疆勝因，龍天……云云。」のように「龍天」以下が省略されている點は興味深い。これは、同一寫本に同じ『俗講莊嚴迴向文』一段を含む『二月八日文』がすでに記されていることもあるかもしれないが、あるいはこの文の読み手が『俗講莊嚴迴向文』の内容にすでに精通していたことを示すようにも思われる。

11. 法王誕跡，託質深宮；示滅雙林，廣利郡（群）品；凡諸勝事，難可談矣！
12. 今則仲春上和，少陽盛事（時）；太子逾越之月（日），天王捧足之辰。釋氏星羅，士女
13. 雲集，奔騰隘路；像設金園，寶蓋旋空，環城豎（樹）福。惣斯多善，無
14. 疆勝因，龍天……云云。又持勝福，盡用莊嚴我僕射貴位：捧金爐兮解
15. 脫香，時清平兮國人康；君臣合運兮如魚水，大唐萬歲兮日月
16. 長。然後風調雨順，歲稔時豐；疫癘消除，吉祥雲集。

S.1441 『(擬)二月八日文』<sup>29</sup>

ほぼ同じ時代と思われる『二月八日文』、『踰城文』の類には他にも以下のような例がある。上記のものとおおむね同じ特徴を表すものであるが、一應参考のために以下にあげておく。

S.5957 『二月八日』では以下のようなものである。

27. 『二月八日』 竊聞智（至）覺騰芳，功勇齋着；大雄方
28. 便，動物斯均。王宮孕靈，寔有生於千界；踰城夜遁，
29. 遂得果於初晨（辰）。今者三春中律，四序初分；玄光建卯
30. 於震明，吉日垂風而首節。金容千鋪，幡花引而環
31. 城；清衆萬餘，鈴梵鳴而匝城。是時夜，桃花始笑，早
32. 鸞思巢；柳絮茂於南枝，輕氷開於北際。總斯多善，莫
33. 限良緣，先用莊嚴梵釋四王、龍天八部：伏願威光轉
34. 盛，福力彌增；興運慈悲，救人護國。復持勝福，此次用莊嚴
35. 我當今皇帝貴位：伏願再安宇宙，瞬（舜）日恒清；四海共納於
36. 一家，十道咸勸無二域。又持勝福，次用莊嚴我河西節度使
37. 尚書貴位：伏願應乾備德，寶位以五岳同堅。坤極治民，寵

<sup>29</sup> 参照黃徵、吳偉『敦煌願文集』（岳麓書社、1995年、頁33）。本稿では修正した箇所がある。

38. 祐并三台而永固。天公主保壽，而（如）滄海無傾移；郎君、小娘子延
39. 長，等江淮而不竭。然後三邊晏靜，人歌永泰之祥；四寇休征，
40. 共賀興寧之慶。災隨舊歲，務散雲飛；福建新春，萌
41. 芽齋繻。

S.5957 『二月八日』<sup>30</sup>

以上に見えるように、前半の文體は異なるものの、莊嚴の部分において『俗講莊嚴迴向文』の影響が強くみられているのである。

以上により、この歸義軍時代以降の二月八日の法會には徐々に『俗講莊嚴迴向文』が應用され、より通俗化した法會、あるいは俗講が行われるようになった過程が示される譯だが、そればかりではなく、『二月八日文』と同一の寫本に押座文が記されているケースも見られ、俗講との関係を一層強く預想させるものである。具體的には、先の S.1441 には、以下の『維摩經押座文』が併記されている。

32. 『維摩[經]押座文』 頂禮上方香積世，妙喜如來化相身。示有妻
33. 兒眷屬徒，心淨常修於梵行。智力神通難可測，手搖日
34. 月動須彌。我佛如來在菴園，宣說甚深脗集教；長
35. 者身心歡喜了，持其寶蓋詣如來。偏偏搖動布金鈴，
36. 七寶雙雙相送遠，直到菴園法會上，捧其寶蓋上如來。
37. 五百花蓋立其前，聖力合成爲一蓋，日月星辰皆總現，
38. 山河大地及龍宮。世界搖時寶蓋搖，世界動時寶蓋動，
39. 一切十方諸淨土，三世如來悉現中。五百聲聞皆被訶，
40. 住相法空分所證，更有光嚴彌勒緣，身心皆拜道徒中。
41. 不二真門性自融，只有維摩親證悟，示疾室中而獨臥，廣談六品
42. 不思議。大聖牟尼悲願深，一一親呼十大緣，皆曰不堪而
43. 問疾，唯有文殊千佛師。巍巍身動寶星宮，請飯上方
44. 香積中，化座燈王師子吼，盡到瓊耶方丈室，作其佛事對
45. 弘經。今晨擬說甚深文，惟願慈悲來至此，聽緣聞經
46. 罪消滅，總證菩提法寶身。火宅茫茫何日休，五欲終朝
47. 生死苦，重述不似聽經求解脫，學佛修行能不能？能者虔
48. 恭合掌著，經提（題）名目唱將來。

押座文とは、言うまでもなく 9 世紀から 10 世紀ころの法會から見られるようになる「押座」の作法に読み上げられる文であり、法會に際して在俗信徒を鎮めるために、講經や變文の梗概となる内容を七言を中心とする韻文で歌い上げていた

<sup>30</sup> 参照黃徵、吳偉『敦煌願文集』（岳麓書社、1995 年、頁 447）。本稿では修正した箇所がある。

ものである<sup>31</sup>。この押座文との関係も、『俗講莊嚴迴向文』との関係とともに俗講との関係を示す重要な資料となると言える。

敦煌文獻には、次節に示す P.2091 のように、これらとともに書き残す興味深い文獻も残されており、二月八日の法會、俗講、講唱文學との関係をより鮮明に示してくれている。

## 二、二月八日と俗講、講唱

このような俗講と関係が深いと見られる様々な『二月八日文』が見られる中で、もっとも興味深いのが P.2091 『踰城日文』と題する以下のような文である。

483. 俞成（踰城）<sup>32</sup>日文 上從兜率降人間，託在（蔭）<sup>33</sup>王宮爲太子（示生相）<sup>34</sup>。捨却一旦世間事，
484. 雪山修道證法身<sup>35</sup>。摩耶聖主往後園，娒女頻（嬪）妃奏樂喧。
485. 九龍齊溫香和水，淨浴蓮花葉上身。魚透碧波堪上
486. 岸（賞翫）<sup>36</sup>，無憂花色最宜鮮<sup>37</sup>。無憂花樹葉敷榮，夫人彼中緩步行。舉手
487. 或攀枝餘葉，釋迦聖主袖中生。牟尼世尊降生來，還從右脇出
488. 身胎。九龍吐水沐太子<sup>38</sup>，千輪足下瑞蓮開。阿斯陀仙啓大王，此令瑞相<sup>39</sup>
489. 極禎祥。不是尋常等閑事，必爲<sup>40</sup>菩提大法王。先聞幼教一群謎<sup>41</sup>，住此
490. 法空令悟難。暫向靈山說妙法，利今利後不思議。今朝希遇大藏
491. 經，似現幽談花益開。暫來聽聞微妙法，學佛修行能不能，能者嚴
492. 心合掌著，清涼高調唱將來。

<sup>31</sup> 拙稿「押座文及其在唐代講經軌範上的位置」、『敦煌變文寫本的研究』、中華書局、2010年、頁240-281。

<sup>32</sup> 俞成、意により「踰城」に改む。「俞成」、「踰城」は音通。

<sup>33</sup> 託在王宮、『悉達太子修道因緣』、『太子成道經』系統は「託蔭王宮」、「八相押座文」は「先向王宮」に作る。

<sup>34</sup> 爲太子、『八相押座文』は「示生相」、「悉達太子修道因緣」、「太子成道經」系統は「爲生相」に作る。

<sup>35</sup> 捨却一旦世間事，雪山修道證法身の二句、他本に見られず。

<sup>36</sup> 上岸、『八相押座文』は「賞翫」に作る。「賞翫」、「上岸」は音通。

<sup>37</sup> 鮮、他本は「觀」に作る。

<sup>38</sup> 九龍吐水沐太子、『八相押座文』は「九龍灑水早是節」、北京 8436 では「九龍灑水早是叉」、S.2352V、P.2999、S.4626、S.548V では「九龍灑水早是貴」に作る。P.2924 にはこの韻文なし。

<sup>39</sup> 此令瑞相、『八相押座文』は「太子瑞應」、「悉達太子修道因緣」、「太子成道經」系統は「此令瑞應」に作る。

<sup>40</sup> 爲、他本は「作」に作る。

<sup>41</sup> この句以降は他本と異なる。

すでに拙稿でも取り上げたことがあるが<sup>42</sup>、この文獻は前節に取り上げてきたような『二月八日文』とは異なるもので、『八相押座文』をもとに後半部分を書き換えて作ったものと見られる。この文獻の用途は、同文獻上には『讚釋文』を首題とする『俗講莊嚴迴向文』を若干書き換えた一文が併寫されていることから、やはり二月八日の法會、おそらくはそこで開催された俗講で使用されていたものであろう。これらの資料により、後代には講唱文學的要素の強い、より通俗化した二月八日の法會へと變容していた可能性が指摘されるのである。

なお、この日にもし俗講の時に何らかの講唱文學が語られていたとするならば、佛傳故事の「託生」から「出家踰城」が語られていた可能性が予測されるであろう。実際に敦煌の講唱文學文獻の中には『悉達太子修道因緣』などの一連の文獻が見られており、また同じ文獻から發展した『八相變』、『太子成道經』などの講唱文學文獻が数多く残されている。いずれも「託生」から「出家踰城」までを中心テーマとしており、それらの使用が考えられるところである。

実際に、『悉達太子修道因緣』、『太子成道經』には以下のように、二月八日の出家踰城を説く一段がある<sup>43</sup>。

太子與妻耶輸倍加精心，六時行道，無有乖闕。後至二月八日，夜半子時，有四天門王喚太子：“太子休戀無明而睡着，出家時至！”太子聞喚，便遣車匿被（鞞）朱肅白馬便擬往雪山。

『悉達太子修道因緣』<sup>44</sup>

特に法會と關わる記述ではないが、釋迦傳中の成道までの部分を中心とする一連の佛傳故事類變文で、この出家踰城の二月八日のみに具體的な日にちが記されている點は何か意圖的なものを感じさせるのである。

また、一連の佛傳故事類變文のうち、『太子成道經』では興味深いことにここに挟まれる韻文の多くが先の『八相押座文』を短く區切り散文の間に挿入されたものである點である。

例えば以下のようになっている<sup>45</sup>。

<sup>42</sup> 『高田時雄教授退職記念論集』未刊。

<sup>43</sup> 一連の『太子成道經』類の中にもほぼ同様の記述が残されている。

<sup>44</sup> 參照張涌泉、黃徵『敦煌變文校注』中華書局、1997年。

<sup>45</sup> 張涌泉、黃徵『敦煌變文校注』（中華書局、1997年）を參照するも、録文及び校記に改めたところがある。これら一連の佛傳故事類變文の書き換え及び翻刻文については拙著『敦煌講唱文學寫本研究』（中華書局、2010年）の附表を參照。

……大王遂問旨臣，[旨臣]<sup>46</sup>答曰：「助大王喜，合生貴子。」大王聞[說]<sup>47</sup>，歡喜非常。

吟 始從兜率降人間，託蔭王宮爲<sup>48</sup>生相。

九龍齊溫香和水，爭浴蓮花葉王（上）<sup>49</sup>身<sup>50</sup>。

不經旬日之間<sup>51</sup>，便即<sup>52</sup>夫人有孕<sup>53</sup>。雖然懷孕<sup>54</sup>十月<sup>55</sup>，却乃愁憂。遂奏大王，如何計教，得免其憂。大王便語夫人，後園之內，有一靈樹，號曰無憂。遂遣夫人令往觀看，得免其憂。遂遣排枇後園觀看。甚生隊仗？[是日也]<sup>56</sup>，敷千重之錦繡，張萬道之花筵。夫人據行<sup>57</sup>，頻（嬪）<sup>58</sup>妃從後。

吟 聖主摩耶往後園，綵女頻（嬪）妃奏樂喧。

魚透碧波堪賞翫<sup>59</sup>，無憂花色最宜觀。

喜樂之次，腹中不安，欲似[臨]<sup>60</sup>產。乃[遣]<sup>61</sup>姨母波闍波提抱腰，夫人手攀樹枝，綵女將金盤<sup>62</sup>承接太子<sup>63</sup>。吟 無憂華樹葉敷榮，夫人彼中緩步行。舉手或攀枝餘葉，釋迦聖主袖中生。……

この中の「吟」に続く韻文部分が、押座文を切りとって講唱體の形式に作りかえられたものであることは筆者前稿にも紹介している。こうした書き換えのプロセスについてもすでに拙稿でも論じ、法會の押座に用いられた文句が自在に書き換えられ、講唱文學が形成される過程もすでに明らかにしてきた譯であるが、「逾城日文」ともされ「二月八日文」のように法會で読み上げられたと見られる先の『八相押座文』が、このように『八相變』中に講唱體の韻文部分として使用されて

<sup>46</sup>旨臣、S.2352V、P.2999 に無し。P.2924、S.548V に據り補う。

<sup>47</sup>說、P.2999 に無し。S.2352V、P.2924、S.548V に據り補う。

<sup>48</sup>爲、S.548V、P.2924 は「是」に作る。『八相押座文』は「示」。

<sup>49</sup>王、S.2352V、S.548V、P.2924 は上に作る。

<sup>50</sup>上の4句、P.2924、S.548V、S.2352V、P.2999 のみにあり。『悉達太子修道因縁』系統には見られず。

<sup>51</sup>不經旬日之間、P.2299、P.2924、S.548V は「不經旬月之間」に作る。

<sup>52</sup>即、龍谷大學藏本、北京 8436、S.2682V、P.2299、P.2924、S.548V は「則」に作る。

<sup>53</sup>孕、龍谷大學藏本、P.2299 は「孕」、他本は「胤」に作る。

<sup>54</sup>孕、S.2352V、P.2999 は「胤」、S.2682V、P.2924、S.548V は「任」、龍谷大學藏本は「胎」に作る。

<sup>55</sup>十月、P.2924、S.548V、S.2352V、P.2999 にあり。

<sup>56</sup>是日也、S.2352V、P.2999 に無し。S.2682V は「也」字なし。

<sup>57</sup>行、P.2299 この字闕。

<sup>58</sup>頻、「頻」は「嬪」の俗訛字。

<sup>59</sup>賞翫、S.2682V は「上岸」に作る。

<sup>60</sup>臨、P.2999 に無し。他本により補う。

<sup>61</sup>遣、S.2352V、P.2999 に無し。P.2924、S.548V により補う。

<sup>62</sup>金盤、經典類には見られず。P.2924、S.548V、S.2352V、P.2999 以降の寫本に見られるようになる。莫高窟第 98 窟などに壁畫資料有り。

<sup>63</sup>この一文 P.2924、S.548V、S.2352V、P.2999 のみに有り。

いく流れの背景には、やはり本稿で論じてきたような二月八日の法會があったのではないかと推測されるのである。

## 小結

筆者はすでに前稿「從敦煌寫本中變文的改寫情況來探討五代講唱文學的演變」において<sup>64</sup>、『悉達太子修道因縁』を含む『太子成道經』、『八相變』など膨大に残される一連の講唱體佛傳故事類を分析したことがあり、その中で、佛讚などの儀禮で宣唱される韻文が俗講の初めに歌われる入話を兼ねた押座文として利用され、またその韻文を佛傳故事の散文部分に組み入れていくなど、自在な變化の中で講唱體『太子成道經』として定式化していく流れと、そしてこうした書き換えの要因に、何らかの法會の用途が反映されていることを論じたことがある。ただ、前稿の次点では、講唱體文獻の書き換えと定型化について主として論じるものであり、また敦煌文獻に多く見られるほかの唱導資料、たとえば二月八日文、踰城文などの願文類、『二月八日押座文』<sup>65</sup>などを含む佛讚あるいは韻文の類と俗講の關係については言及する紙幅もなく、二月八日の法會とこうした講唱體文獻の關係も論じることはできなかった。

そこで本稿では、前稿の成果をもとにして、さらに敦煌本中にみられる『二月八日文』などの唱導資料などの發展から、二月八日の法會の様相と時代的變化、そしてそこで実際に悉達太子修道因縁の様な講唱文學が行われていた状況などについて検討を加えてみた。これにより、二月八日の法會の中から俗講、踰城出家にかかわる一連の佛傳故事類變文の發展の流れがさらに鮮明になったものと考えられる。

( 作者は廣島大學大學院綜合科學研究科教授 )

<sup>64</sup>拙著『敦煌講唱文學寫本研究』、中華書局、2010年、頁3-38。

<sup>65</sup>P.2250の箋に題名のみ記載有り。